

生業の変貌

(せいぎょうのへんぼう)



座生沼の共同苗代
(昭和32年5月
鎌形寿夫氏提供)

現代の生業(職業)は、夫婦・親子間でも異なるのが一般的です。ところで、戦前の農村は、ほとんどが農家と呼ばれる農業に従事し、わずかな非農家も農業と密接な関係で結ばれていました。しかし、昭和50年(1975)の統計では、農業集落平均数のうち非農家が7割を占め、その多くは農業と直接関係がない状況になりました。この農家の変質は、作物生産の面でも食生活の変化を反映し、従来の米・麦類・雑穀・豆類・芋類の生産が減少して野菜・果実・畜産物が上昇しています。

このような状況の市域農業を見ると、昭和40年(1965)頃から畑作が施設園芸へと転換されました。しかし、昭和44年(1969)の記録的雪害でハウス施設が潰滅状態となり、農家のリーダーが兼業農家へ変化し、市域農業が変貌したのです。

そして、変貌のもう一つが戦後の稲作技術の進展でした。それは(一)早期栽培・早植栽培、(二)除草剤による除草・病虫害防除、(三)土地改良、(四)施肥(せひ)技術と品種改良、(五)機械化等の発展と進展であるといわれます。このうち(一)の特質は、保温折衷苗代(ほおんせつちゅうなわしろ)の普及です。これにより、種池払いや種蒔時の水口・焼き米などの儀礼が放棄されました。同様に(二)では虫送り、(三)は雨乞という儀礼が消滅したのです。

この放棄と消滅を時空的に見ると、虫送りのように戦時中から消滅がはじまった儀礼もありますが、経過よりも儀礼が家単位か地域単位かが重要です。種池払い・虫送り・雨乞などは地域共同儀礼で、その背景に寺社と深く結びついた信仰儀礼を支えていたのです。すなわち、稲作という労働(夔(け))と儀礼(晴(はれ))を軸とした地域の生活リズムが崩壊したのです。その上に農業機械が急速に普及すると、稲作は完全に家族単位となり、地域共同体から離脱する結果、儀礼の意義も失われたのです。こうして民俗社会が変貌してしまっただけです。

詳しくは...

* 小川浩他 2000「座談会 野田を語る =戦後の農業の変遷と農政=」『野田市史研究』第13号 野田市

* 東畑精一編 1968『日本農業の変革過程』岩波書店

大根の出荷作業（昭和 43 年 10 月 鎌形寿夫氏提供）



農村の風景（昭和 15～16 年頃 待山栄次郎氏提供）
後方に見える建物はたばこ乾燥所。東部小学校付近で撮影。

